S7-5

遷延性意識障害患者に対する用手的呼吸介助法の有用性

Usefulness of manual respiratory assistance for persistent vegetative patients

大前　綾子、平元　美由紀、松村　望東美、八木　良子、足立　幸枝、北村　吉宏、
萬代　眞哉、衣笠　和孜、西本　詮
自動車事故対策機構　岡山療護センター

Ayako Omae, Miyuki Hiramoto, Motomi Matsumura, Yoshiko Yagi, Sachie Adachi,
Yoshihiro Kitamura, Shinya Mandai, Kazushi Kinugasa, Akira Nishimoto
National Agency for Automotive Safety & Victims'Aid, Okatama Ryogo Center

[はじめに]

我々は遷延性意識障害患者に対し、主に腹臥位等の体位ドレナージを行って排痰を促し、肺合併症の予防に努めてきた。しかし、中には腹臥位をとることが困難な症例もあり、誤嚥性肺炎を繰り返すこともある。そこで、体位ドレナージの有無に関わらず用手的呼吸介助法を行い、その効果について検討したので報告する。

[対象・方法]

痰の自己喀出が困難で、繰り返し誤嚥性肺炎を認める意識障害患者6名。受傷からの期間は1.5～15年(平均8.5年)。腹臥位又は仰臥位・側臥位で、用手的呼吸介助法を毎日10分、2ヶ月間実施した。実施前後の胸部CT・CRP値・蓄痰量・バイタルサイン・SpO2値・胸郭の動き等を比較し、評価した。また一部の症例では、毎日ではないものの用手的呼吸介助法を継続し、経過を観察した。

[結果]

CT所見では6名中5名の陰影が若干改善。SpO2値は呼吸介助法施行前平均93.5%から施行後平均95.2%と6名全員で上昇し、最大5～6%上昇した症例もあった。CRP値は、呼吸介助法施行前後ともに、全症例で低く有意な結果が得られなかった。蓄痰量は計測にバラつきがあり比較できなかった。

[考察]

CT所見の改善・SpO2値の上昇等から、体位に関わらず、用手的呼吸介助法によって分泌物が効果的に排出されたものと推測された。今までに呼吸介助法と腹臥位の併用による排痰効果については報告されているが、腹臥位のとれない症例に対しても呼吸介助法は有効であると思われた。また、用手的呼吸介助法を継続した症例ではその後肺炎が認められず、遷延性意識障害患者の呼吸管理において、このケアを日々継続することが肺合併症の予防につながるものと考えられた。